

森林・農業班 C

森林資源をめぐる村落の諸実践—南ラオス・「エスニック街道」の事例から— 中田友子（シリントーン人類学センター）

キーワード：南ラオス、村落移動、モン・クメール系集団、実践、資源管理

Village Practices over Forest Resources — a case study of the “ethnic road” in Southern Laos —

Tomoko NAKATA (Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre)

Keywords: Southern Laos, village migration, Mon-Khmer groups, practice, resource management

1. 研究の目的

南ラオスの、さまざまな民族の村が移動してきてモザイク状に構成された地域において、複数の村が共同で利用する森林の管理、資源利用のあり方、そして資源の商品化、村落の生業などが、時代や政治・経済状況の変化のなかで、どのような変遷をたどってきたかを見ることをとおして、国家や地方レベルの制度・政策とローカルなレベルでの実践との関係を明らかにする。

2. 対象地域の概況

調査対象とするのは、南ラオスのチャンパーサック県、ラオス第三の町パクセからも近く、国道 23 号線沿いにある地域である。この国道はパクセとパクソン（ボロヴェン高原）を結び、またアタプーやサラワン、セーコーンといった他県への道にもつながっているため、人や物資を運ぶトラックが頻繁に往来している。この街道沿いへの村落の移住がいつから始まったかは定かではないが、1940 年代には既にモン・クメール系集団の村が奥地から食料不足や仏植民地政府の政策などにより移動しているという記録がある [Hours 1973]。その後、ラオス内戦・ヴェトナム戦争中も多くの村が戦火を逃れて移動してきており、また 1975 年の革命以降も少数民族の低地への定住化政策のため、最近までこの動きは継続している。

森林利用については、焼畑としての利用がもっとも重要だが、森林で採れる野生動物、野草なども地域の住民にとって経済的に大きな価値をもつ。近年の森林保護政策により、焼畑は制限される傾向が強まっているが、実際には、焼畑が現在ももっとも重要な生業であることに変わりはない。

3. 問題の所在

対象地域の森林資源管理・利用を捉える際に 2 つの重要なポイントが挙げられる。第一に、政治・経済状況のめまぐるしい変化である。仏領期、内戦時代、社会主義政権時代、そして経済開放政策へ転換後の現在と、ラオスは社会・経済的にきわめて激しい変化を経験してきた。こうしたマクロレベルでの変化がローカルな森林資源の管理・利用のあり方に少なからず影響を与えたと推測される。ただし、森林に関する国家的な制度的変遷のみを問題にするのではなく、地域レベルでの変遷という観点が必要である。というのは、1989 年以前のラオスには明確な森林政策は存在せず、森林法が制定されたのも 1996 年 [百村 2001] と新しく、こうした国家レベルでの森林政策の不在という状況で、各時代の地方行政は森林をどのように扱い、さらにローカルレベルでの森林資源の管理や利用は実際にどのように行われたのだろうか。

また、この地域はパクセという大きな町から近いこともあり、社会・経済状況の変化の影響を比較的受けやすいと考えられる。例えば、農産物の商品化はこの地域では既に 60 年代には行われ、バナナなどがパクセの市場などで売られていたという。ただし、商品については時代によって変化が見られると考えられる。焼畑で採れるバナナの葉やタケノコはもっとも一般的な商品であり、これらは栽培するものではなく、自生するものである

が、このほかに換金用に栽培されるものもある。かつて換金作物として栽培された落花生は現在では実らなくなったという。そして、98～99年当時、もっとも換金作物として期待されていたのがドリアンであり、焼畑でもこの木を植える世帯が増加する傾向にあった。ほかにも数種類の果物が栽培され市場で売られていたが、これらはいつ頃から、どのように栽培されるようになり、また商品化されたのか。また、こうした商品の世帯における経済的重要性はどのように変化しているのか。

さらに、生業の変化という問題も挙げられる。98～99年に行った筆者の調査では、40年代に移動してきた村の世帯が利用している焼畑の収量が著しく減少していた。一方、60年代に移動してきた村の世帯の焼畑では比較的収量が多かった。前者は、不足した米を購入するために賃金労働に就かなければならず、農業離れが起こりつつあった。ただし、農業離れの原因を単純に土地の生産力に求めるべきかどうかには疑問が残り、調査が必要である。

第二のポイントとして、民族あるいは村落移動が挙げられる。異なる民族集団が共同で森を利用するにあたって、それぞれの慣習の違いは森林利用や管理のあり方に対しどのような影響を与えたのか（あるいは与えなかったのか）。また、異なる時期にやってきた村落や世帯が、同じ森林をともに利用するにあたって、互いの間でどのような調整や交渉が行われたのかということは、自然資源をめぐるローカルレベルの政治の問題である。

以上、本研究はマクロレベルの政治・経済状況と地域におけるミクロなレベルでの実践との関係を明らかにすると同時に、社会、政治、文化的な状況と自然環境・資源との関わりについての考察にもつながるものとする。

4. 調査計画

1) フランス植民地時代の文献調査

仏領期の状況を広く、またできるだけ詳細に把握するために、海外古文書館およびフランス国立図書館において、植民地時代の公文書、報告書、ラオス関係の仏語雑誌（Bulletin des Amis du Royaume Lao など）から関係資料を収集する予定である。

2) 現地調査

2004年中に1ヶ月から2ヶ月間の調査を実施する。筆者が98年～99年に行った調査とは異なり、1村落ではなく、複数の村落が共同で利用する森に焦点をあて、そこから複数の村落と村落間の関係などを調査する予定である。

参考文献

Hours, B. 1973 Un terrain d' étude des rapports inter-ethnique: la route de Paksé à Paksong (Sud-Laos). Cahiers ORSTOM, série Sciences Humaines, vol.X no.1.

百村帝彦 2001 「ラオスにおける保護地域管理政策の課題—地域における実態を反映した実効性のある政策へ向けて—」『林業経済』638号

英文要旨

This study focuses on transition of forest management, use of forest resources and villager' s livelihood, in the area composed by the villages of different ethnic groups which have immigrated in different period. The forest management there must be influenced, on the one hand, by the political and economic situations in Laos, which changed many times, and on the other, by the multi-ethnic environment in which different groups with different background should negotiate with each other over the land and resource use.